

## 虚脱の海

浜辺に座り込んだ僕は  
遠くの海を  
眺めるともなく眺めていた

白く反射する光を身にまとって  
その景色は  
色という色の全てが透明だった

かつて僕の胸へ輻射していたそのままに  
現在  
それは遷って来ていたのだ

僕の傍らには、なかば砂に身を沈めて  
壊れたノートパソコンが  
潮風に風化しようとしている

何物かが死に絶えた  
その思いが  
世界を虚脱状態で満たしていた

枯渇した夢想の匣へと次々に押し寄せてくる  
無数の既製品  
誰にとっても都合よく描えられた

静かに眠っている者が  
再び、そもそもの初めから目覚め  
自由の中に描き始めるのはまだ当分先だろう

僕はここに座り  
残りの人生を  
まるで北国の者たちが春を待ち焦がれるように  
ただひたすら待つことにしよう

(2008.8.10)